

## 劉心武の長編小説『鐘鼓楼』 ——薛大娘の「心理的習慣」及び「姑」役割——

福原 みつ希

### I はじめに

長編小説『鐘鼓楼』<sup>1</sup>は、時間、空間、人間それぞれを複雑に絡み合わせているが、一日、ある四合院、結婚を中心とすることにより、統一されている。<sup>2</sup> 作者がいうところの「当代北京市民社会生態群落図」を「花瓣式」あるいは「剥桔式」（一つの花の芯から出て、花卉は各方向から一点また一点へと開く、或いは柑橘類の皮を剥がすようであり、蜜柑の実を一つ一つに解剖したかのようなのだが、しかし合わせると全体となる）という構成法を用い、各種の平凡な人々を描写している。<sup>3</sup>

作者は現実主義（リアリズム）の深化という前提のもとで、歴史哲学的な観点に立って、現実表象の描写からその深層の構成の指摘へと掘り下げる。（中略）人物の性格と感情的変化の原因を表現し、生活に内在している法則を深く認識させる。（中略）我が民族の性格と心理形成を再認識させた。<sup>4</sup>

上に引用した論文では、「人物の性格と感情的変化の原因」や「生活に内在している法則」「我が民族の性格と心理形成を再認識させた」とあるが、具体的にはどのような「原因」「法則」の「再認識」であるのかについては述べられていない。

この小説の中心人物は、六つに分かれた大きな章の中のそれぞれ五つの小さな節（一から三十までである）ごとに変わる。その節につけられている小題には中心人物が記される。各節では、中心人物の社会的背景、家庭環境、過去の出来事が描かれる。

本稿では、様々な登場人物の中でも薛大娘に注目し分析を行なう。彼女は自分の役割を無意識に演じることで、ある一部の他者より優位に立っているとい

う感覚を持つとする。彼女自身の掟と合わない行為をする他者に対する批判は、その役割の名の下に正当であるとされる。しかし彼女の役割が他者の行為を操作する働きを持たない場合は、自分に対する他者のイメージを無意識的に操作しようとし、優位であるという感覚というよりはむしろ不安に根ざした心理状態から、順調に物事が進むよう努力する。それは、個人の役割意識、行為の動機や目的と関わっている。その行為の意識的、無意識的な意味についても考察する。この薛大娘描写においては社会によって形成されてきた習慣が個人の「心理的習慣」(原文まま)となっていることが表現されている。その「心理的習慣」は個人が無意識にとりいれたものである。それは人間相互の対人的場面においてタブーとされる行為において明らかになる。個人が従っている「心理的習慣」はもともと社会によって形成され、他人によって作られたにすぎない。またそれは個人の経験や準拠集団により異なる。ある「心理的習慣」によってある一部の他者は心理的な拒絶を受ける。ある者はある「心理的習慣」に忠実に従いながらも、別の状況においてはそれに応じて態度を変容させ、他者に対して印象操作をする。その手段として笑いや気遣いの気持ちを表わす言葉がある。個人的な事柄であるが、誰もがよく見かけけるような人物の描写であることから、普段当たり前としていることが当たり前のこととして提示されている。それは逆に言えば、当たり前のことを当たり前のこととして見逃さない態度の表われとみることができる。その他の登場人物については別稿において考察することにした。

## II 薛大娘の「嫁」との関係からみた「心理的習慣」

### 一 現実に即する「心理的習慣」

第一章の第一節では、「鐘鼓楼の下、ある一家が祝い事をするのに、最も心配しているのは誰か。」という小題がついている。小題には、中心として語られる者の名前が書かれておらず、その属性が記されている。第一節では、その中心人物である薛大娘が「最も心配している」ように描かれている。

薛大娘から見れば、一日二十四時間という刻み方は、新しい一日が午前零時から始まるという概念である。最近子供の話を聞いて影響を受けて理解したものであるが、心理的習慣から言えば、彼女はやはり空の色が四合院にさしこんで来るのを、一日の始まりだと見なす。<sup>5</sup>

ここでは、薛大娘が「一日の始まり」を「概念」よりも、実際に「空の色」という目に見ることのできる現実の生活から判断を下すことが示されている。それが彼女の「心理的習慣」である。「空の色」は様々な明暗色がある。目に見える「空の色」も現実の生活も、数字のように規則正しい単調なものではなく、人間にとって捉えどころのない自然の力による変貌の存在・可能性を感じさせる。そしてこのことは、薛大娘がその捉えどころのない曖昧なもの、そのような「心理的習慣」に拠って行動することを表わす。「空の色」に敏感に反応して行為しなければならない翻弄される人間の姿を見ることが出来る。

## 二 薛大娘の「姑」役割に依る「心理的習慣」

彼らには早く来てすぐ手伝うようによくよく言っているのに、見てみる、空の色が目に見えてだんだん明るくなってきているのではないか、なのに影もみえない。薛大娘は心の中でただ孟昭英だけを責める。これは彼女の一種の心理的習慣である。夫婦が孫娘を連れて来て、息子が父母に挨拶してもしなくてもこだわらない。息子の嫁がもし挨拶を忘れたら、あるいは挨拶が遅かったり、声が意に沿わなかったり愛嬌がなく聞こえたりしたら、薛大娘は非常に不愉快になる。ふつう彼女は別に怒り出すことはないが、息子の嫁に直面する時、一本の笑い皺も見せようとはしない。<sup>6</sup>

薛大娘は「姑」としての役割意識を持ち、「結婚式」の準備で「最も心配」している。「結婚式」という非日常性の場において「姑」役割はより明確化される。ここにおいて薛大娘にとって「姑」は「結婚式」が順調に運ぶことを「最も心配」する重要な存在であり、そして最も張り切ってすべきことをこなさる存在であることを意味する。「空の色」が明るくなることは、「結婚式」の始まりを暗示する。「影」はそれを裏で支える「嫁」の姿である。光があるのに、「影」がないのはおかしい。何か狂っていることを示す。薛大娘は「姑」としての「心理的習慣」をもっている。息子が自分に対して礼儀を守らないのは許されるが、「嫁」がそうであることは許されない。自らが「姑」であり相手が「嫁」であれば、「姑」はその個人の掟に「嫁」が合わせるべきだと考える。「嫁」は「姑」に対して、「挨拶」を遅らすことも、「声が意に沿わなかったり、愛嬌がなく聞こえたり」する「挨拶」も許されない。「姑」であることによって、「嫁」よりも支配的立場にたつにふさわしいと考える。しかし「嫁」が「姑」自らの

掟に反すると、「不愉快」になり「苦勞」していると感じる。しかし薛大娘は「嫁」によって「不愉快」にされたとしても、「心理的習慣」を必要としている。「心理的習慣」は人生に「不愉快」という波風を立て、空虚さを忘れさせる。そして「姑」役割があることからくる「心配」により、「最も心配」することのできる自己という存在の価値感を得ることができる。「姑」にとって「嫁」は愛する「息子」を正式な手段で奪った唯一の人間であると同時に、これまでの母役割を継承する人間である。その奥には女としての無意識的な闘争心と母役割を失った寂しさが潜んでいるのかもしれない。家族という一つの集団にとって「嫁」は血の繋がりのない余所者であるが、他人と比べれば戸籍上の繋がりをもつその成員の一人という境界に属する者である。薛大娘は「心理的習慣」に感情的に従っている限り「不愉快」から逃れることはできない。しかし、ある人間に対する「不愉快」さのような心の揺れは感情的な繋がり的一种とも言うことができ、役割を超えて人間と関わりを持ちたいことを表わしているように思われる。「姑」は血の繋がりのない「嫁」に対しては自己の掟に合わせて行為することを求め、「息子」に対しては求めない。血の繋がりのある愛する「息子」は、「姑」にとって近くても遠くても同種の遺伝子を持つことから類似性が認められ、好ましい人間とされる。つまり薛大娘は「姑」役割とその「心理的習慣」を保ち、そのことで余所者であるが家族の一員である「嫁」には「心理的習慣」から来る「不愉快」によって「嫁」を「不愉快」にさせながらも従うこと要求し、自己と密接な関係にある「息子」には求めていない。自己と「息子」の変化は求めない。たとえどんなに「不愉快」「心配」があっても、薛大娘にとって「心理的習慣」は不明瞭な現実とその変化に伴なう感情の起伏により、生きている感覚を得るため必要である。また「結婚式」において「最も心配」し重要な役割を果たさなければならない、という価値のある自己の感覚を得るために必要なのである。そしてその反面「姑」役割意識から生じる「心理的習慣」に従い、「ただ」孟昭英という「嫁」だけを「責める」立場にある感覚があることで、そこにおいては優位に立っている感覚を得ている。従って、薛大娘はこのような「姑」役割からも「心理的習慣」からも離れることはできない。

### 三 「文句」を言う正当な手段となる「姑」役割

第二章の第七節では、小題に「嫁姑の対立は真に永遠のものではあるまいか」とある。薛大娘は、結婚式の準備の手伝いになかなかこない長男の「嫁」の孟

昭英に対して叱りつけた。嫁はそれなりの事情があったことを筋道を立てて話した。だが薛大娘はまず、「嫁」が遅く来たことを批判し、次に息子が来ていないことを「嫁」に問い詰め、嫌味を言う。

早朝から超過勤務に行ったなんて。薛大娘はこの話を聞いて、心の中ではただ息子のことを想って、孟昭英に対して更に反感を持たざるをえない。彼女は思いきり文句を並べ立て始める。「あなたって、なんて善良で優しいんでしょう。日曜日なのに、彼を超過勤務に行かせるなんて。あなた達はそんな少ない超過勤務代さえも不足なの。あなたは今日が弟の良日だって知らないの。わざと私達の家の団欒をさせないつもりじゃないの。私は朝早くから戸口で待ってたのに。左を見ても右を見ても影が見えないし、道理でこんなに陰でこそそそしているわけだね。……。」<sup>7</sup>

薛大娘は「結婚式」において「最も心配」しているはずであるが、「息子」のことで孟昭英を責める。責める際には孟昭英の遅刻は「結婚式」の順調な進行の妨害であるとは告げない。「嫁」に対する場合は、「結婚式」よりも「ただ」愛する「息子」だけに対する「想い」に満ちている。「息子」を奪われた「姑」にとって、「嫁」はより幸福な存在と映り、無意識の闘争心がある場合、そのような存在には「反感」を持たざるを得ない。薛大娘は嫁に「善良で優しい」と述べる。これは、悪くて優しくない「嫁」として捉えていることを意味する嫌味である。彼女には、「嫁」はわずかな超過勤務代がほしいために夫を働かせることのできる主導権を握った嫁と映る。これは自分の血の繋がりの集団が別の集団に主導権を握られていることを暗示する。「弟の良日だって知らないの。」は、「嫁」が既に来たことから知っているということが、明らかであるのに、故意に使われる。知っているにもかかわらず遅れる「嫁」である、と薛大娘は言いたい。「わざと」という表現を用い、「嫁」を悪意のある者とする。「私達の家の団欒をさせない」と言うのは、「団欒」に協力しない余所者として捉えていることを表わす。或いは家族であるのに、「団欒」に協力しない悪意のある者とする。「朝早くから」は息子の「早朝から超過勤務」と結びつき、薛大娘も「息子」もよく働かされていることを意味する。働かせているのは孟昭英という「嫁」であり、働かされているのは自分と「息子」であると言いたい。「待っていたのに」と述べ、自らを被害者とし、「嫁」を加害者とする。「影」は孟昭英のことを指し、「結婚式」という明るい場において、裏で働くべき「影」である。それ

と同時に薛大娘に「影が見えない」ことは、自分の奥にある隠された心理が見えないことを暗示しているようにも思われる。そして彼女にとって「嫁」は「陰で」何かをする者とされる。「息子」の生活は、薛大娘には既に見ることのできないものであり、「嫁」によって隠されたものである。薛大娘は「文句を並べ立て」ることで、「嫁」を注意する資格のある「姑」役割を行なう。「文句を並べ立て」る状況において表面的なその場限りの勝利している感覚を得ようとする。また孟昭英という「嫁」をより良くない者として落とす表現を用いることで、自己をより良き者とする。また薛大娘にとって「結婚式」という非日常性の場は、家族の「団欒」を楽しむための正当な手段の一つである。「嫁」との「不愉快」な感情的繋がりを感じ、「文句」を言える立場にある「姑」にとっては現実の生活に活力を見出す場の一つでもある。

#### 四 薛大娘の「影」としての孟昭英

準備の手伝いに早く来れない理由は、孫娘が風邪をひいたためであると「嫁」は説明をした。しかし、孫娘が「魚を食べたい」と言うと、「本当に風邪をひいているなら、一番に生臭くていやなはずだ。」と考え、薛大娘は「嫁」を信じない。薛大娘にとっては、「嫁」の説明は孫娘の風邪を利用した言い訳に聞こえる。薛大娘には風邪をひいている時、魚は食べたくないはずであるという考えがある。それは必ずしも誰にでも当てはまることではない。しかしそう信じている。風邪をひいているのに「魚を食べたい」と言う孫娘は、疑いの対象にならない。「嫁」の説明こそが疑いの対象になる。つまり薛大娘は、孟昭英の遅刻は、孫娘の風邪ではなく「嫁」自身の過失であると考えたい。そして薛大娘にとって、孟昭英という「嫁」は自分の過失を孫娘を利用して認めないか、責められることを避けようとする人間と映る。

孟昭英が手を洗い終わって、小屋に歩いて入っていくと、薛大娘は平常の状態を取り戻して、彼女に向かって路喜純のために何を手伝うべきかを言いつけて、自分は立ち去った。薛大娘はまだこのような習慣もっていて、嫁が来さえすれば彼女はこれ以上食事の支度をしない。孟昭英は以前から彼女のこのような心理とやり方に反対だった。<sup>8</sup>

薛大娘の「平常の状態」とは感情の伴なわない「姑」として当然あるべき状態を表わす。誰もが認める役割であることにより、「姑」は「嫁」には当然に感

謝の意を表わす必要もなく、仕事を押し付けても良いという「心理」状態にいる。「嫁」は自分の「息子」を働かせていると考えるから、「嫁」に対し「反感」を抱きながら、自らは実際に「嫁」に仕事を押し付けている。すなわち、「嫁」が「息子」を働かせることと、「姑」が「嫁」に仕事を押し付けることは似た性格のものであるが、薛大娘はそれに気づかない。薛大娘に見えない「影」とは、彼女の視点からみた「嫁」である孟昭英である。孟昭英は薛大娘の「姑」としての「嫁」に対する習慣的なやり方に、「反対」しながら従っている。薛大娘は「嫁」に仕事を押し付けるような「姑」役割を遂行しながらも、無意識にその「姑」役割のやり方に「反感」を抱いているかもしれない。薛大娘は心理的により有利な状態にあると思えるような「姑」の役割を無意識に演じる。薛大娘の自己にとって価値ある心理的習慣となっているため、その「姑」役割との結びつきは強い。

### Ⅲ 薛大娘の他人との関係からみた「心理的習慣」

#### 一 詹麗穎との関係からくる苦しみ

「あれ、お宅のその匂いよくないみたい。」声と同時に、ある人が薛家の小屋に入った。(中略) 薛大娘はこの口ぶりに、心の中で「どきっ」として、非常に苦しい思いをした。<sup>9</sup>

道理から言えば、薛家が結婚式を挙げるのに、薛大娘はまた相当縁起を重んずる老人であるのに、人の家に行って、初めの一言がどんなことがあっても、「お宅のその匂いよくないみたい。」であるべきではない。しかし詹麗穎はこのことに少しも考えが及ばない。<sup>10</sup>

「匂い」は気分や雰囲気や徴候を表わす。「結婚式」においてそれが「よくない」という発言は、この良日に「薛家」において、薛大娘の気分やその時の雰囲気、何らかの「縁起」の「よくない」徴候を暗示する。薛大娘は「縁起」を重んずるため、「匂いがよくない」という発言には、敏感に反応する。薛大娘は詹麗穎の何気ない言葉に「どきっ」として、「非常に苦しい思いをした」。「縁起」に反することは彼女にとって「非常に苦しい」のである。詹麗穎のこの発言によって、「結婚式」と「縁起」を重んずる場におけるタブーがあることが示される。しかし薛大娘は詹麗穎の発言に対してはただ「心の中で」「どきっ」とする

のみであり、苦しくはなるが彼女に対してその発言はタブーだとは示すことはしない。「嫁」に対する「文句」と同様に、その発言は「縁起」の「よくない」ものであるが、薛大娘は他人の発言の「匂い」には反応し、自己のそれには気づかない。そしてその「よくない」発言が暗示する徴候通り、薛大娘の「心配」する出来事は生じる。

## 二 タクシー運転手と関わる不安

タクシーは八時半に来る予定である。(中略) 薛師傅が早目に戸口に行かされているのは、タクシー運転手がこの場所をみつけれないのを防ぐためである。しかし彼女はやはり安心しない。なんとなくただ彼女だけが最も早く車のクラクションを聞きつけ、花嫁を迎えるすべての細かい事を手配できるものだと感じている。<sup>11</sup>

薛大娘は「嫁」の孟昭英が遅刻した場合は「不愉快」であった。しかしタクシーがなかなか来ないことに対しては、出迎えまで出して取り計らっているのに「安心しない」。「不愉快」は他者に対する攻撃性を含む感情であるが、タクシーの関係者に対して「不愉快」であったとは描かれぬ。「安心しない」は、他者や状況により与えられる「不愉快」より、受身の消極的な感情である。ここにおいても、薛大娘は「ただ彼女だけが」と描写され、「結婚式」において「最も心配」していると同様、「最も早く」タクシーに反応して、「すべての細かい事を手配する」重要な役割を担い、それに値するという意識が強いことが表現されている。

## 三 澹台智珠との関係における気遣い

花嫁を迎えに行く役目を「嫁」の孟昭英と京劇女優の澹台智珠に頼んだが、澹台智珠は仕事のために行けなくなる。

薛大娘は三人の見知らぬ人が現れてすぐ不安を感じた。(中略) 澹台智珠があんなふうには眉をひそめて、驚いていると、心の中は澹台智珠よりもさらに狼狽し混乱した。花嫁を迎える車がすでに門口に停まっているのに、これはどうしたらよいのだろうか。彼女は澹台智珠に(中略) 出発してほしくてたまらない。だが今の様子では、澹台智珠は人をほうり出して立ち



去らせることは許されないようだ。彼女はしかたなくへりくだった笑顔で澹台智珠に言う「智珠さん、じゃああなたはまずこの方々を家に入れて座ってもらって。私達は門口でしばらく待ちます。用が済んだらできるだけ早く来てくださいよ。」<sup>12</sup>

薛大娘は「三人の見知らぬ人」を見て、「不愉快」ではなく「不安」を感じる。澹台智珠の様子を見て、「心の中」は「狼狽し混乱」する。薛大娘は澹台智珠に対しては、「嫁」に対する態度とは異なり、ある行為を求めながらも無理を言うことはしない。「へりくだった笑顔」で気を使って言葉をかける。澹台智珠に気まずい思いをさせないような配慮する。

澹台智珠が三人の客を彼女の家に入らせた後、薛大娘は大急ぎで門口に出て行くと、彼女をひどく驚かせたのは門口に車が停まっていなかったことだ。(中略) 彼女の目の前は真っ暗になって、心の中で今日は誰の機嫌を損ねたというのだろう、どうして物事は思い通りにいかないのだろうと思う。<sup>13</sup>

薛大娘は車が停まっていなかったため「目の前が真っ暗」になる。誰を責めることもなく、「心の中で」「誰」かの「機嫌を損ねた」ため「思い通り」いかないと思う。そして再び彼女の「心の中」を「どきっ」させる出来事が生じる。薛大娘は他人が原因で起こる「思い通り」いかない出来事に関しては、「嫁」にしたように「文句」を言うことも「反感」を持つこともない。彼女の「心の中」で原因とされる「誰か」とは、「空の色」のように移り変わる人間には捉えることのできない現実を感じさせる。彼女は「心の中」で「思い通り」でないことについては、自分が何かをしたことで「機嫌を損ねた」と思う。「嫁」の場合は責めることができるが、他人の場合は責めようがなく、「不安」になり「狼狽し混乱」する。「空の色」に依る「心理的習慣」であるため、順調でなければその現実の生活に合わせて気分も変化する。

#### IV おわりに

薛大娘の「心理的習慣」とは一つには「空の色」という目に見える現実にして行動するものであった。二つには「姑」は「嫁」に対してその役割があることから、一方では「不愉快」という感情的な繋がりを維持しながらも、一方

では感情の伴わない役割意識のみから自己の要求に従わせる習慣であった。三つには「縁起」を求めため、それに反することがあれば不安になるというものであった。四つには他人が関わる思い通りにならない出来事は、その他人ではなく、不明瞭な「誰か」の機嫌を損ねたためとする曖昧なものによって自己が不安にさせられることであった。薛大娘にとって「結婚式」という非日常性の場における「姑」役割は最も「心配」するにふさわしい立場であり、「嫁」との関係において「姑」役割は、「文句」を言って「責める」ことを正当なものとするができるものである。たとえ「心配」や「不愉快」といった感情的な起伏があっても、「姑」役割があることによってこの良日に最も価値のある、また「嫁」よりも優位に立っている自己を感じることができる。しかし「嫁」である孟昭英が、薛大娘の心の中で「影」と表現されたことは、「嫁」には「姑」役割に対する「反対」があることから、薛大娘の心の中に「姑」役割に対する潜在的な「反発」がある可能性も考えられなくはない。「文句」はただ他人でもあり身内でもある「嫁」だけに向けられる。他人とは異なる一部遠慮のない関係がある。仕事を押し付けることのできる「嫁」から「不愉快」にされ、「思い通り」にならない他人から不安にさせられ、「空の色」に左右される感情をもつというのが薛大娘の「心理的習慣」であったとまとめることができる。しかし様々な現実の状況変化に伴って生じる不安という「心理的習慣」からは、逆に薛大娘の家族の「団欒」の場の一つであり「薛家」の良日である「結婚式」のために、優越感から「姑」役割と遂行しようとする生き活きとした想いの表われも感じられる。薛大娘は四合院に住む一人の人間であり、この形象の分析を通して先行研究において言及されてきた「人物の性格と感情的変化の原因」及び「生活に内在している法則」についての分析を試みたつもりである。この分析が中国の人々が言う「再認識」に関する「再認識」的作業と言うにふさわしいかどうかはわからない。この長編小説は、様々な人物が語り手の客観的な視点から描かれており、それぞれ中心人物本人が気づかずに抱えている問題を明らかにすることで何らかの開かれ得る道を示そうとする啓蒙的精神を見ることができる作品である。本稿では薛大娘の分析のみに留まり、これはこの小説の一側面に過ぎない。中国の北京のある四合院の結婚式の日と関わる人々という限られた範囲の物事に関する描写から、人間の普遍性が表現されており芸術的意義があると思われる。従って他の人物についての分析を進めることも今後の課題としたい。

註

- 1 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷，华艺出版社 1993 年。初出は《当代》1984 年第 5 期、第 6 期。
- 2 「第二届“茅盾文学奖”获奖作品简介《钟鼓楼》」《人民日报》1985 年 12 月 23 日（《中国现代，当代文学研究》中国人民大学书报资料社）
- 3 章仲锷，「长篇小说创作的新探索——评《钟鼓楼》」《文学评论》1985 年第 2 期（收朱家信编：《中国当代文学研究资料刘心武研究专集》）蔡葵，「在缤纷流动的下层生活里——读《钟鼓楼》的独创性」《文艺报》1985 年第 6 期（《中国现代，当代文学研究》中国人民大学书报资料社）
- 4 章仲锷「长篇小说创作的新探索——评《钟鼓楼》」文学评论 1985 年 2 月（朱家信编《中国当代文学研究资料刘心武研究专集》）512 頁。
- 5 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）10 頁。蘇琦訳『北京下町物語』恒文社 1993 年を参考に、筆者が原文を訳した。
- 6 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）11 頁。
- 7 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）54 頁。
- 8 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）55 頁。
- 9 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）46 頁。
- 10 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）47 頁。
- 11 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）60 頁。
- 12 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）68 頁。
- 13 郭友亮・孙波編《刘心武文集》第一卷（华艺出版社、1993・12）68 頁。